繪本雪鏡談　一

ヘ13
4436
1

貸本屋
嶋村

画本雪鏡談序

書肆剞劂繡像稗史若干編。其書率忠臣伏節。孝子報親之偉事。使讀者興起良心以知義方。皆所有補於風化之萬一也。而頃者又

A13
4936
1

刺重本雪鏡談若。此書也。假設大月来者。險邪百端。遂奪邦家之威權車。以為話柄。篇中妃嬪撲着孫弘賊蒜之偽飾。盧杞奸甫之故智。顛倒是非眩惑視聽情狀。終寓天道禍淫之應。不可以私智權術免至理。顧與前所刺數書。虛實絶駁。雖如大不相同。而於稗史家懲惡之體甚為得。余是以有取焉。因贅一言為之序。

文化乙丑季妹

蓑淵山人識

繪本雪鏡談巻之壹

惣目録

巻之一

發端御将御遊の圖
大月長吉卿出仕の圖
大月長源が侍
若殿弓場上覧の圖
小枝右内色ごとの圖
長源右内弑殺す圖
大月史と讀て志を変ずる話　同圖
大月謀て薬石弑逢せ話　同圖

巻之二

大月長源兵斗を以出身する話
大月長源毒薬謀計の図
長源臨斗御膳方と争論の図
御膳方の諸吏危難の図
鏡山の老臣鎌倉に赴く話
鏡山城評定の図
大月源蔵職任昇進の話 同図
我則公諸老臣を罰しめる話
大月源蔵刺客の謀計を用る話
忍者の謀計朧迫の士と戦しむる図 其二

巻之三

鏡山城名馬を鎌倉居館に献る話
瀧沢頼母馬相を観る図
谷江藤左衛門横死の話 同図 其二
朝倉の居館火災の話
瀧澤頼母正室を諫むる図
鎌倉火災の図
大月源蔵老臣へ書を送る話
朝倉家産家の図
多賀の訴事を揚て義勇小判る図
朝倉義永瀧沢が慢試を罵る話

巻之四
瀧澤頼母自殺の話
瀧澤が父謙舎に仇をとる図
瀧澤頼母生害の図
坂井郷の農民大月へ慈済の話 同図
農民里正が居宅に洗する話 同図
大月義人騒乱を鎮むる話
農民一揆の図
浦井典膳が女珍妝の話
大月浦井が娘を娶る図 其二
巻之五
多賀家の庶子袴着の話
義則公側室を愛しみし図
定の方大月に車を託する話
定の方孔行の図
玄女玉笹定の方に忿怒と須ふ話
玉笹孔を遁て謙舎ゑ赴話
玉笹膳を拾ふ図
玉笹孫て離次を打図
笠原喜十郎殺述の話
藥河笠原を諫る図
笠原酒狂み卒を斬る図

巻之六
侍女雛次密書を奪ふ話　同図
大月謀て書券を乞話
玉笹密書を捜る図
野路井文助が話
風穀落人文助を訪ふ図
築摩川西岸の話
義則石馬にて築摩川を渉し来ふ図　其二　其三　其四
小枝佐渡守一騎関を渉る話
佐渡守轡を揚て日向守を逐ふ図
目録終

巻之七
小枝日向守が縦横密使の話
小枝佐渡守驕然揚て日向守が縦横を制す図
多賀家懿封の話
久松三九郎が傳　久松そ騙が獅図
久松三九郎吉良助太郎武術を競ふ図　其二
玉笹路次木於て勇が飛と話
玉笹清院に代る紫の図　其二
室檀院敵玉笹の密事を宥ふ話　同図

巻之八
甘言に迷て大月玉笹を欺話　同図
大月法生を欺図

罪人達々党与の集る語　并ニ後大月か手ある図
内行の評々鄙人岩井の状にある語　鷹雪殺逃の図　其二
悪党岩の湯さんと謀る語　別離遊宴の図

巻之九

悪術の織して大月利害の用る語　大月深貝が術を識る図
久松三九郎深夜悪者の捕る語　同図
五笹舟の家書の尋る語　其二　銭亥の法生毒殺
毎菓の用て岩の害する語
赤井法印業調の図　岩井主三郎井中殺毒を疑ふ

巻之十

小枝佐渡守鎌倉に移る語　鎌倉落の士の殺る図

鎌倉殺の法生皆の逃る語　大月達の返大手の図　其二
大月達の急して京国へ帰る語　小枝佐渡守と返尾の捕る図
養子与を倶して返尾毎の枝る語　同語井又助御の図
大月陰謀露顕の語　反中も大月罪人の捕図

巻之十一

岩井主三郎家出の語　佐渡守の告る語
岩井出奔の図
佐渡守大月か罪の定る語　佐渡守聖路井文助の結同の図
小枝佐渡守大月罪人等同の図　中沢主八郎の図
大月達々獄中に殺する語　同図
切腹の正して国家静謐の語

賊の女捕へて逆婦政尾の殺害　文吾文蔵の写之圖

巻之十二

中臈尾上が傳　同其

岩藤尾上を恥かしむる語　岩藤尾上が亡霊に編まるる圖

お初が傳

お初忠人の変を察る圖

お初岩藤を討て主の讐を報る語　同其二

お初出身の圖

惣目録終

繪本雪鏡談巻之壹

目録

○發端　御将御遊の圖

大月長左衛門出仕の圖

○大月長源が傳

若殿弓場上洗壮圖

小枝庄内色言の圖

○長源庄内試殺一圖

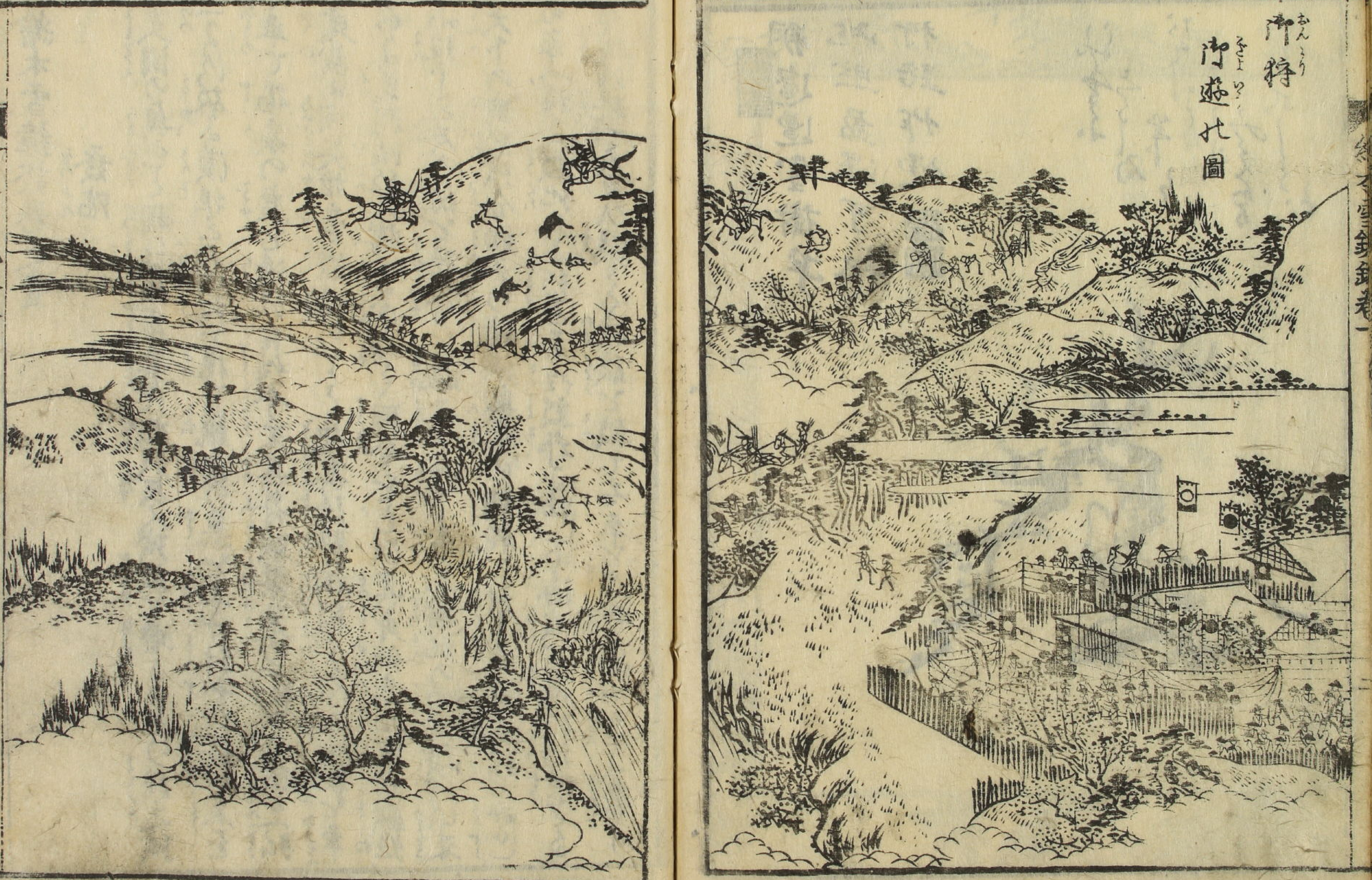
○大月史毬殺て恋と変ずる話

〇長源夜晋書を読て志を発する圖

〇長源謀て薬石を盗む話
同圖

朔邊遭雪樹草
此馱盈深可紀
行路作便　凛

秋雪に
とくし窓
なてし
笑にて
そことこは
みえぬる
跳れしむ


御狩（おんかり）
御遊（ぎよゆう）之圖

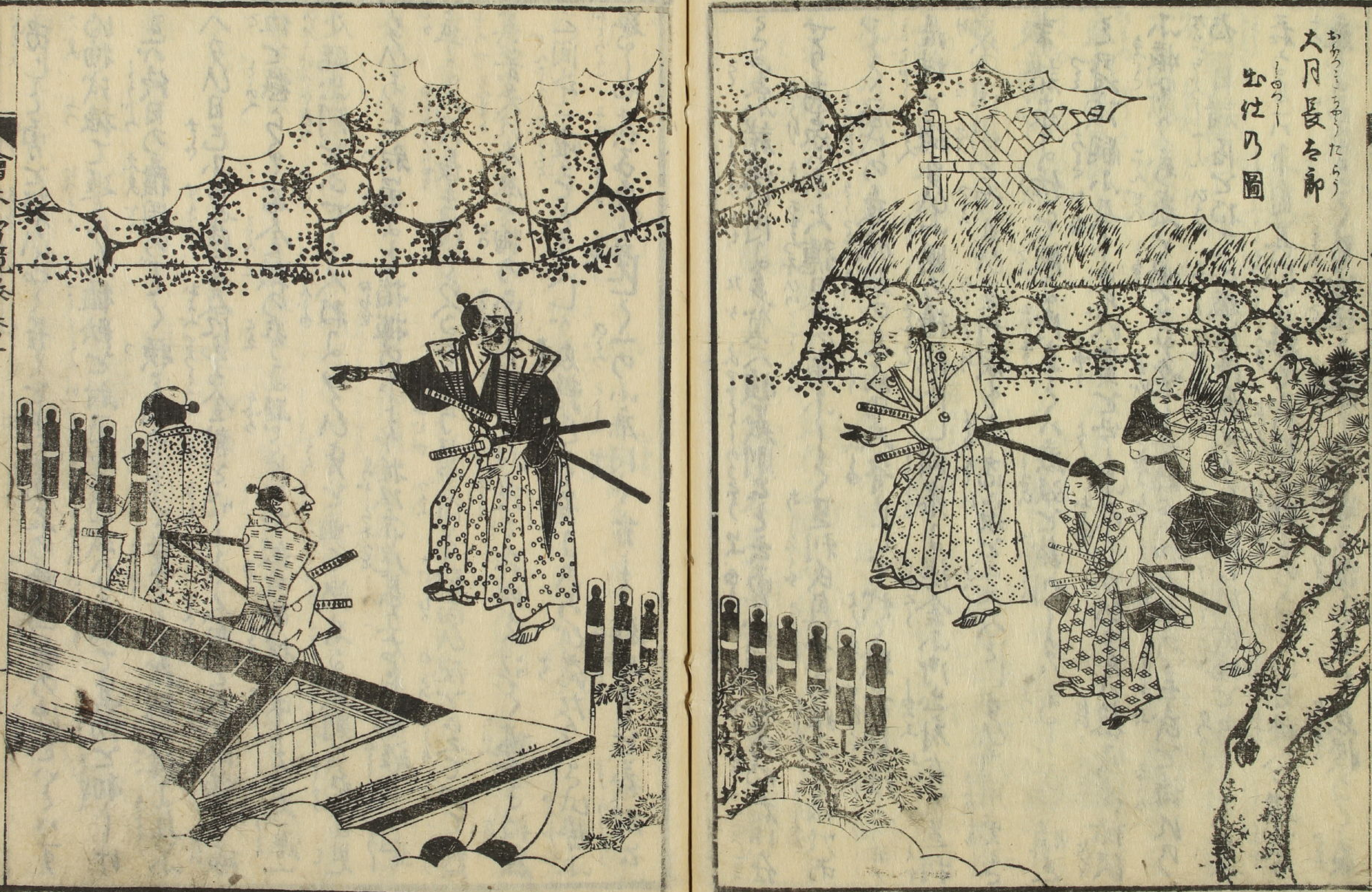
繪本雪鏡談巻之壹

發端

夫國の興亡と謂ハ強弱衆寡に非ず只人の機を得さるゝの能ふ所一なり故に漢祖三尺の劔を提て嬴氏の暴を平げ神仙一統の功を奉て揚家の虐を誅し古往今来其類験是のごとし五口国之弘建武の間英雄豪傑蜂のごとく起其強弱相敵して互に輸贏を争ふに足利治部大輔尊氏出て綱令をうばひ其身征夷将軍の職に經ふ經じ三尺の劔を提て叛逆を誅し天下撥乱の功を顕して以来天下の國郡悉く分知且の諸侯勲労の諸将を封じて各其治を守らしめて王一統に數化大小名を萬姓歡拝にあはし四海波を揚ず治世する撫に耕て食ひ鑿て飲腹を鼓て太平を唱ふ萬世四色の喜ひあり

ゝ宗家諸侯の内に多賀大領義則といふ勇武英智の名君にて在せり當家ハ元天穂日命の裔にして足利氏興業の始より股肱の臣として歴代の鎮頃城の三尻の太守として代々城前國焼山の削居城を構へ本國の藩鎮とし間来に總舎に御出府有て足利家の護衛と利ひ足利家も亦當家を元も大切とし御用重き事諸家に倍して國に御在くハ庶政を裁判しめひ大小の事を講じて三野城嗣に及しめへば賞を与へて及しめひ多くハ黎民其徳沢に懐なり萬衆を唱るに嗟し于時文和五年の春武を講ずの為一日諸臣をねて山猟の遊あり義則ら故武備をもつとしめて出る事一ハ下自其風に移て武は不躾るのみく此日従へる諸士共卒まで及ぶまで隊伍に熟しを退に潤くおも怠慢なく家

大月長太郎出仕の圖



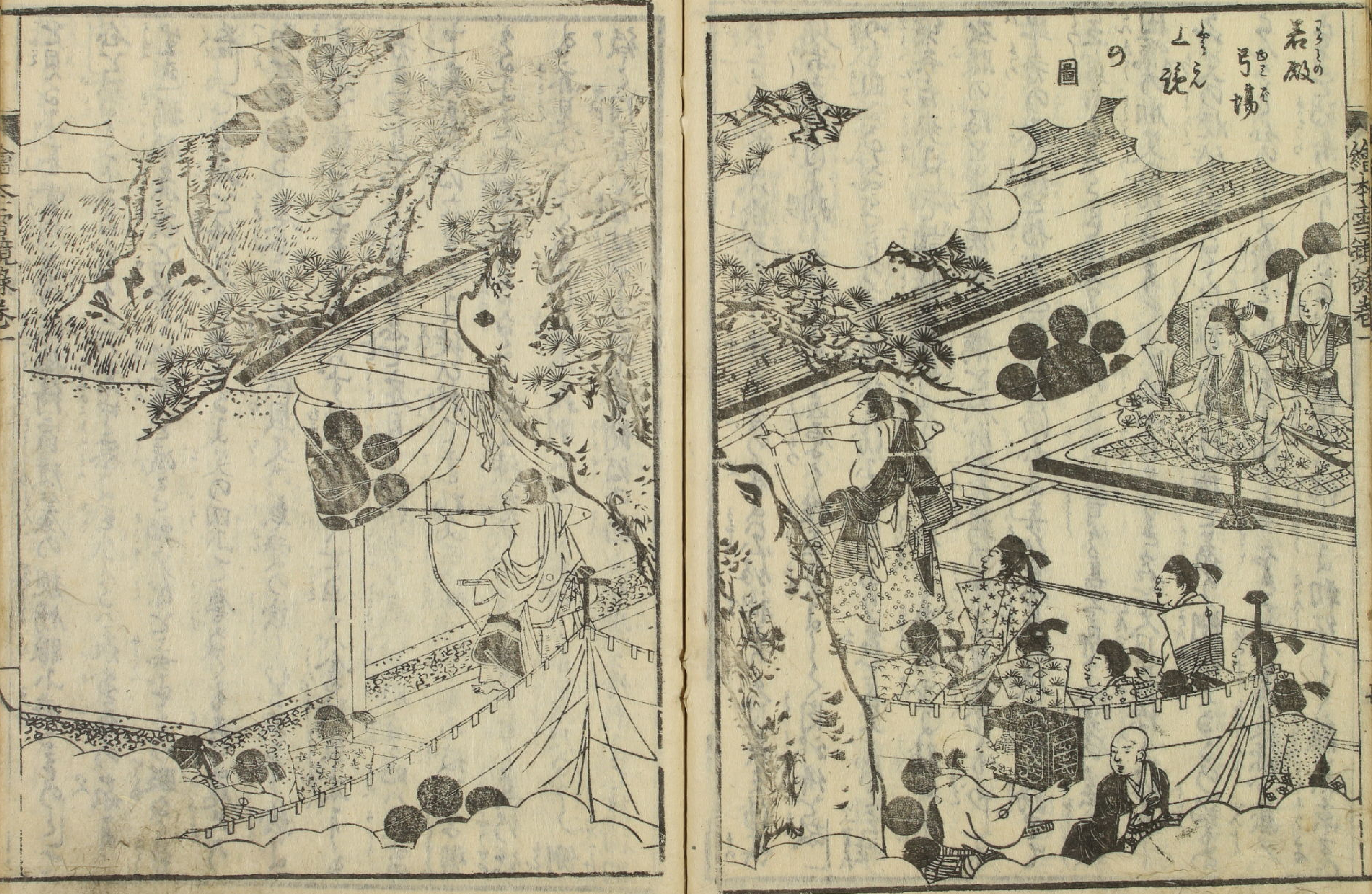
雑兵ども勇を競ひ争ひ苦しと追ひ巌石の険路岩の嶮をといはず獲物を擬て逃る猛獣を射留突留或は生捕て其功を励しけるが終日の獲岡のごとく積て山のごとく重しが義則公猶も興に入給ひ日已に夕陽に及びける全軍を鳴しく人衆を集め給ふ隊伍を整らる其全軍の籏うに登るにしや彼方の林の中より大鹿一疋走り出で列を乱せし人数に向ひ牙を噛で衝来る義則公是を見給ひあれ射留よと指揮の下より物頭赤星五右衛門が組下の若者に大月長之清といへるもの弓箭番へ駈向ひ鹿を望て切て放其箭矢ば大鹿が胸の正中を徹と射貫しかば流石に猛かりし彼鹿之間斗一躍をとりて死しが忽然としく岩に当りて倒たりさば此勢に驚しや其子鹿と覚しき一の小鹿何ぞ方より駈出るを義則公

御覧ありて是も射よと仰あるに長之丞鳴としも言ざるゆゑ何思ひけん猶豫せし体赤尾此と見て大月長之丞何とて疾射よやと急き立れ共尚躊躇して居たる内小鹿は早くも逃去たり赤尾甚五右衛門大に怒り長之丞を馬前に呼び縦令君の仰なりとも得く射損ずるは是非なし御咎を受ざるまじ何とて猶豫して逃せしぞ君の命を背く条甚以奇怪なり申訳ありやと罵りしかば長之丞畏て平伏し御咎の条恐入れ私賤身分にて畏多くも仰を承り何ぞ違背仕るべきや只一箭にと打向ひ候へども能く見れば彼獣親しく今中るが如く親子の情を見ては目前親鹿の斃たる死を不便に思で兎角憐みを加へ哀憐の情思ひも中に動き矢を放ちかねて御咎ふ存ずる猶豫の内に取逃せし条恐入申すべき外なし其

上は必ず狗猪の附にまかせらるゝもいかでかこれを背かんとて勇氣滔々と
しかく見えたると義則云是小児を聞て大いに感心の心を催されけるに
赤尾甚五右衛門とちいふ一條暢の候には樹の枝をおらず胎子に育て
牛羊を屠ざしは聖賢の戒を齋く天地生物の功を讃るにあるを偶
與にも子ふぐく国君母麻を射させ又子麻を殺しく種類を絶んとせ
せしは是吾非道なるなり殊賤者といへども真心自然に通ふ潤色を
見て仁と知ることのあらり今日の褒賞に抜擢の沙汰に及ぶべき所
るまじども渠親子の愛情深くそをのうと見んとは渠が子あらば後出し
叙べきさらぬ命せらるゝに是より御恩掛なしく召る長兵衛は雀躍して
君恩の厚を悦び御殿の列に加りあつまるなか

大月長源が傳

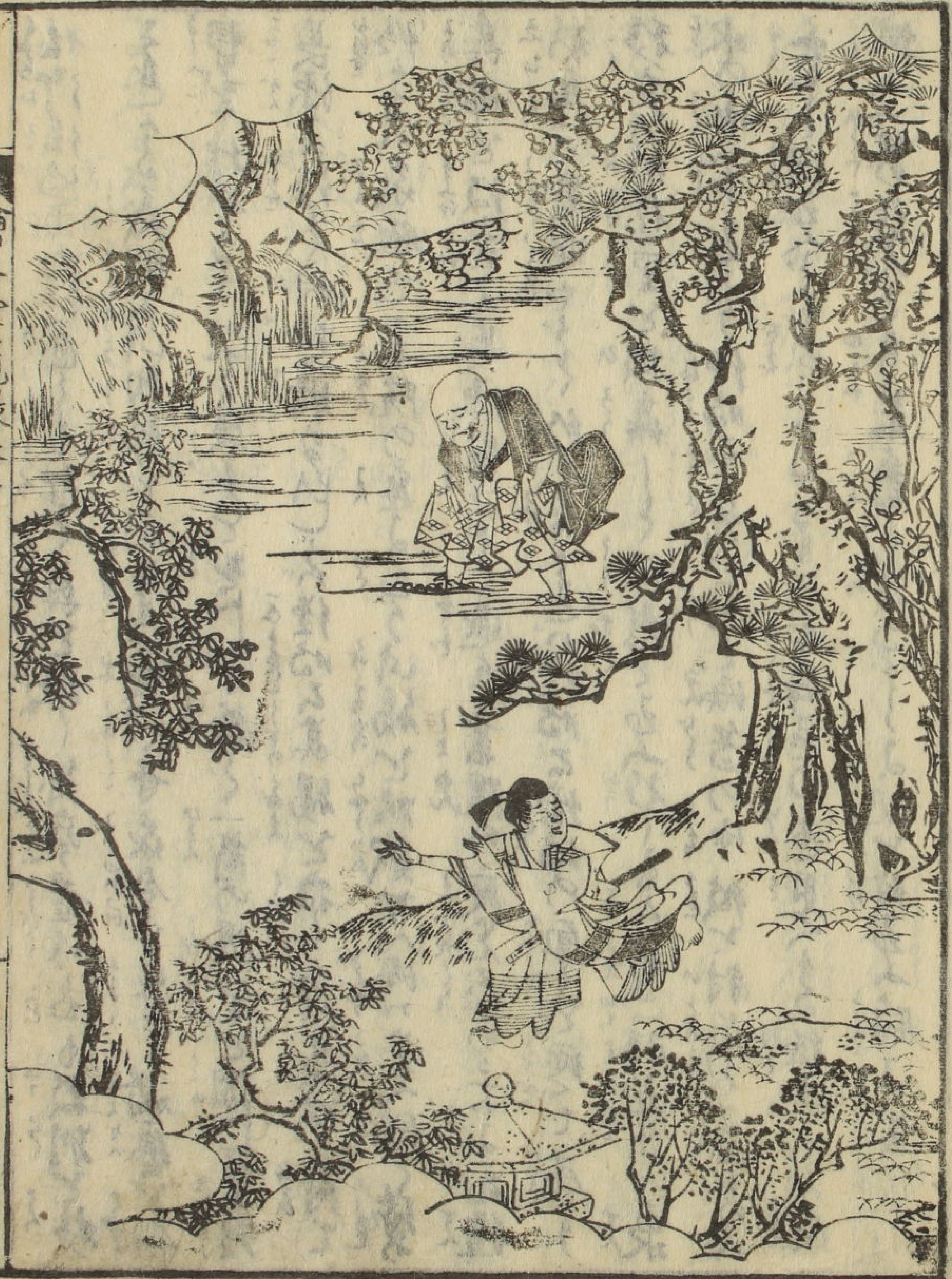
積善の家には餘慶あり積不善の家には必餘禍あり大月長兵衛其
身は卑賤の内に列しながら忠義の志厚く性正直にして内外神佛を敬し
少も曲る事なきものなり此長兵衛に一男子あり名を長之助と云性
純粋俊爽にして讀経書識辯既に長じ幼くして老人の智に勝る程も
衣服の好を求ず飲食の麁を厭ず貧窮の中に生長すれども少しも
卑劣の挙動をなさず是は長兵衛に喜び其の長の後は家を勝りて
立身もなすべきものなりと殊に愛し育みたる長之助十二歳の春大藏
因縁の父の功によりて家道小右衛門と名を大月長源と改名し
父の悦び大方ならず是は精く御抜擢を蒙り側役となるの鶏あ
らんとしの中に楽み己が志に向ともとて兵営長源が薬人
まもるを宿るあるより長源は館中に勤仕して

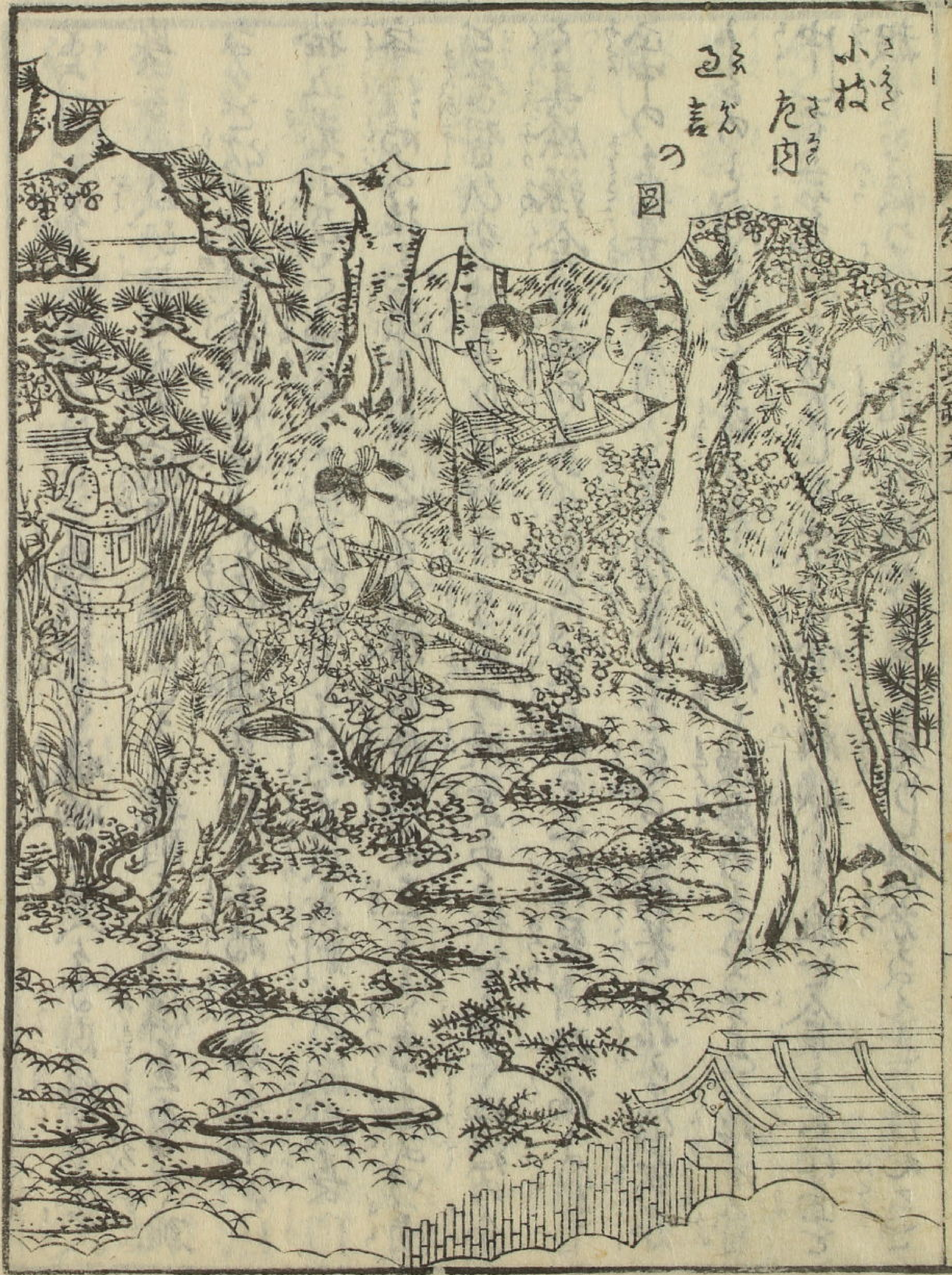


若殿弓場上覧の圖

と見るに高堂大厦の結構綺窗珠簾の觀傍眼に遮るものとして
心を慰るかゞるまゝに心中密に思ひけるハ家中平の家に有
生れ攝服素衣を以て飢寒を凌ぎ朝夕を安ずるの暇なく労
苦して生涯を終るべき身なるに父の切に教て學なくも君に愍み乃
恵をうけし事是全く君の洪恩父の慈愛の致しむる所なり然に
真恩を報ずる事ともおもハず空く年月を過さバ禽獣草木に等しき
者なるものぞと終も志を定日々の勤から息に眼有る時ハ家士の
中真道を得たる人に従ひ読て書札又学問并に弓馬の技を学習
なる中にも真志の者あるが故に練熟の年月を延てまた真の妙を
も求易からずりし故に義則ふかく感せしまゝ業成るが側
役と同じく召仕れしと云へども側役の面々も渠が伶俐にて能輔助

となれど喜びも己を知るを思へバ却て憐愍を加へられる内縁なく父
母も亦及び母とも失ひ孤となりしが義則公の御憐憫益ふかく孤
なるを以て採舎の往返にも必ず連られたり平時親近の年を添
拾五歳に及で採舎に在て勤仕しける時真に義則公の嗣儲長門
守殿時に拾三歳にならせ給ひ採舎居館にましましけるが武の道
と学習ひ給ふ時なりしかバ一向弓術の淺業あるべしとて如役の面
々真除採舎に在勤士の子弟同年齢なるを召聚め射場にて
正中の多寡により賞罰有べしと定られ的芸を始め給ひ家君
じものと射るが終に其一人優し練磨のものなりしが独り皆
中して家名を揚たりしも次の全く射損じて耻を令て前に面を
報じも後の不図も見人の魁なるなど定りし優劣なりしが経時云と



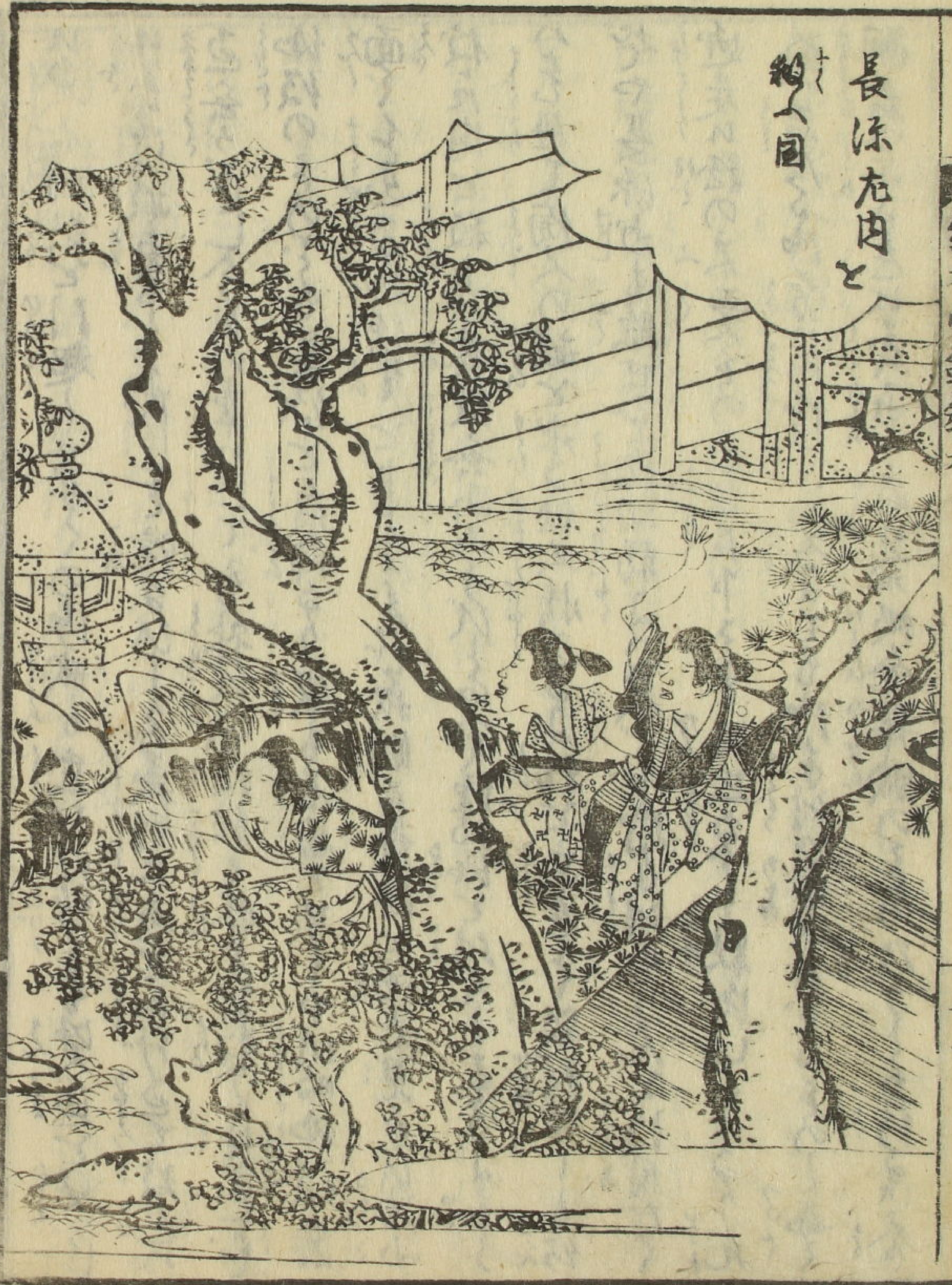

小枝左内
逸吉の図

拙御振舞よ出し面々も抑て奥を催し笑声を罷もあり数刻を移
されたる義則は此動静を聞て一旦長門守家合を呼て諸藝を励
習ふ事神妙なりいで褒美をとらせんと頼く一箇の提重を潤しめ義経
長添よ持たせ射物(賭の品)とせば経晴は其錫を指し出せば長添の許よ対て
給るは家臓て書院の庭よあり此錫を以て興ぜんと海は出く弦を懸る
其席を辞し座よ長添畏りて退出き書院の庭先へ到る所よ充纒
彩席を敷連ねくれど告げは経晴は結構の面々を従へて席よ
移るは彼提重を披露しく結構を出て都へ白鷺一羽飛来り泉
水の中へ下りくる経晴は左右を顧て海驚の中彼を射留よと望めの者へ
云含し同席人とも及ばざるほどは否辞退の色見へたる趣なるは家
来に一藝人とて業番く畏るかりよ硯を付走る時よ[illegible]

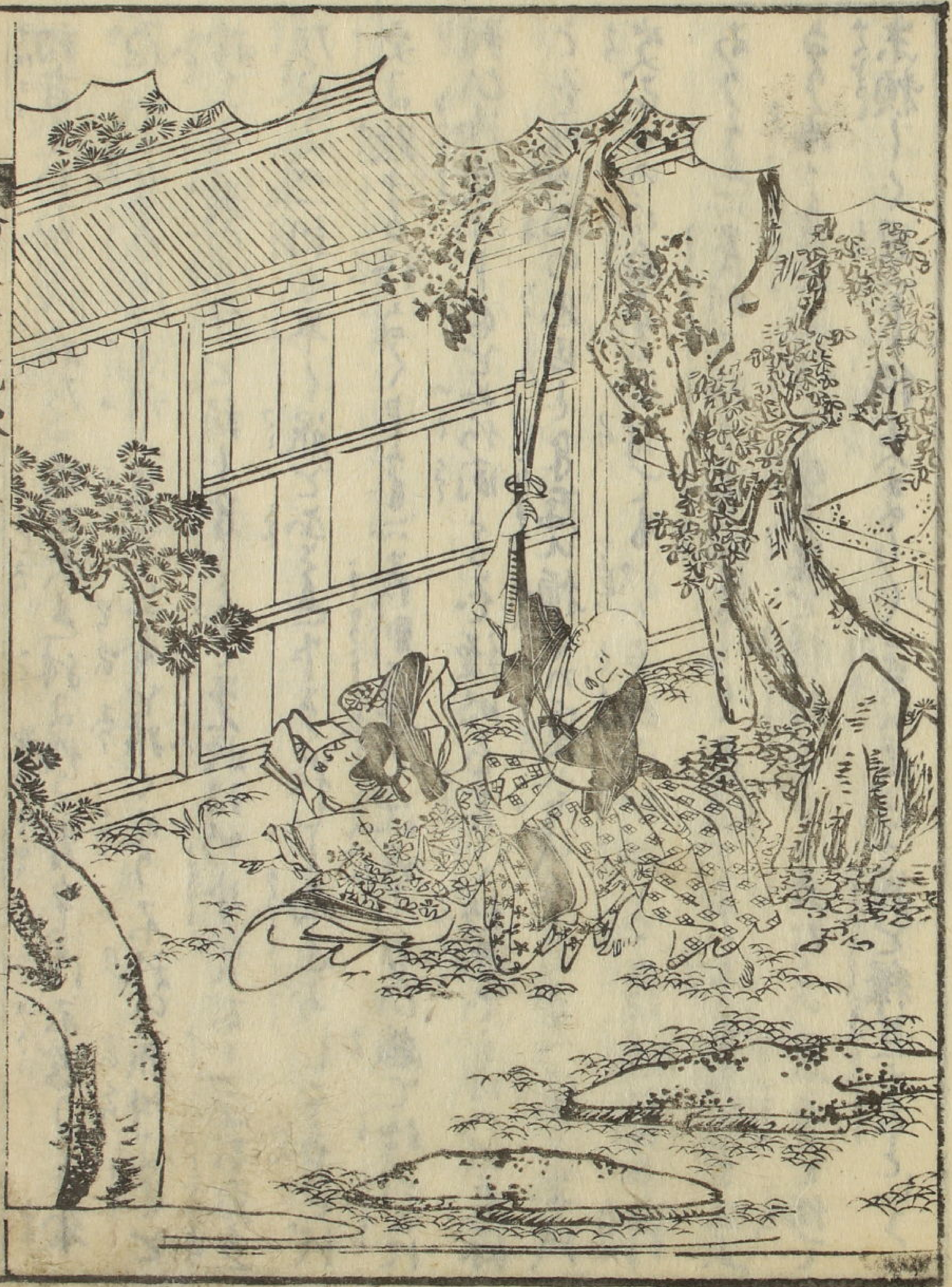
於是馬が二男左内と云者の側よ在て扨笑ひ来たくへ此社射留の其
ほし的と射るたよ是くへ中るへし況や彼方より方寸の間に余るよ
彼又様あれく扎るもと猶は是正鵠の如ざるが如くよありしを
やらさる経晴は思はず立座し海獣も嘉し武士の弓矢執て物よ
向ふへ軍陣よ臨がごとし然るよ衆中よ於て家よ恥と与かるるこそ
哥経なり然射留は行とらさてる左内左の射留めるさと念まし給ひ
弥いや亡き射留めで即時よ一命とりさるべし経晴は重く詞とも出し
ふくは神仏試凝しより引く気せうと我左迄し業其は鷺の眼中を
ぐちと貫き是は息弓を捨るひ左内を目を抜付よ切付るへば左内息
よ身を避ると倶しく治の詞よも似ば周章卑遠逃出まてを追さじ
とのし退逐見へば左内毛驚るさ樹林を潜り乱れを見と逃延さじ経

時広の追手に車急はして已に危見へし所大月長源是を見るより
徑に泉水を渉て左内が逃来る先へ廻り射場へ通ふ所の小門を開き
たりし左内是に血路を得る立出して此門より逃出んとすれば長源急に其戸を試
閉經時広に左に追詰られ左内を逃せしを見て大に怒り主人に近付
せんとするを抱留るこそ低法なる小悟坊主の所ねぶるよと云へ拳大
月目掛切付ると式長源潜て其手を執經時広を速に組伏佩
刀を奪ひとる時御役の面々漸に馳付先長源を引退經時広を縛ぐ
騒ぎ書院の方へ傳ひきたる是より先御役の中より早大夜義則
広の詰役人若とりし是が因庫役側役大に驚き也て馳付り義則も
既に御書院に出まひ經時広を見て經るゝ此行事の之に違て在ふ
不通し拳動ぞ經時広卒然しまひ小枝左内武士の有なじと逃去に

此度へ不圖悪を引起し巣くの御戒も忘却往昔くも哭血を發し
は我が御赦免下さるべしと疾なひしが義則広島と和げ也て数者ば
色云ぐ尤し今日の事ハ強ても咎べ汝能く怯えをすべし則主に逃く
御役のものども長源を護衛なり梁も不届とせしや此時御役者
面くを生るの沈す皆と申上るまゝバ義則広長源を叱と見るひ汝小
枝左内を殺しハ其理無ふあるべしと今は經時海を待んとするよ誤り
ハ老遅て傍人の救を求る杜人情なるよ是と忘て數對せしを行
がや長源おも臆せず私幼弱よハ在ども御手討おゝんと後因だく
逃走ハ徑の不忍ものと恐れ下さる恐れながら欺良しくいなり元
人ふ君たる御方ハ如何に人までも御手討ハ避さ玉ざるものと毎く
嗣君へ示さ玉ハ我ふり及び人へ假令卑賤のものたりとも約束を



長添左内と紹人図



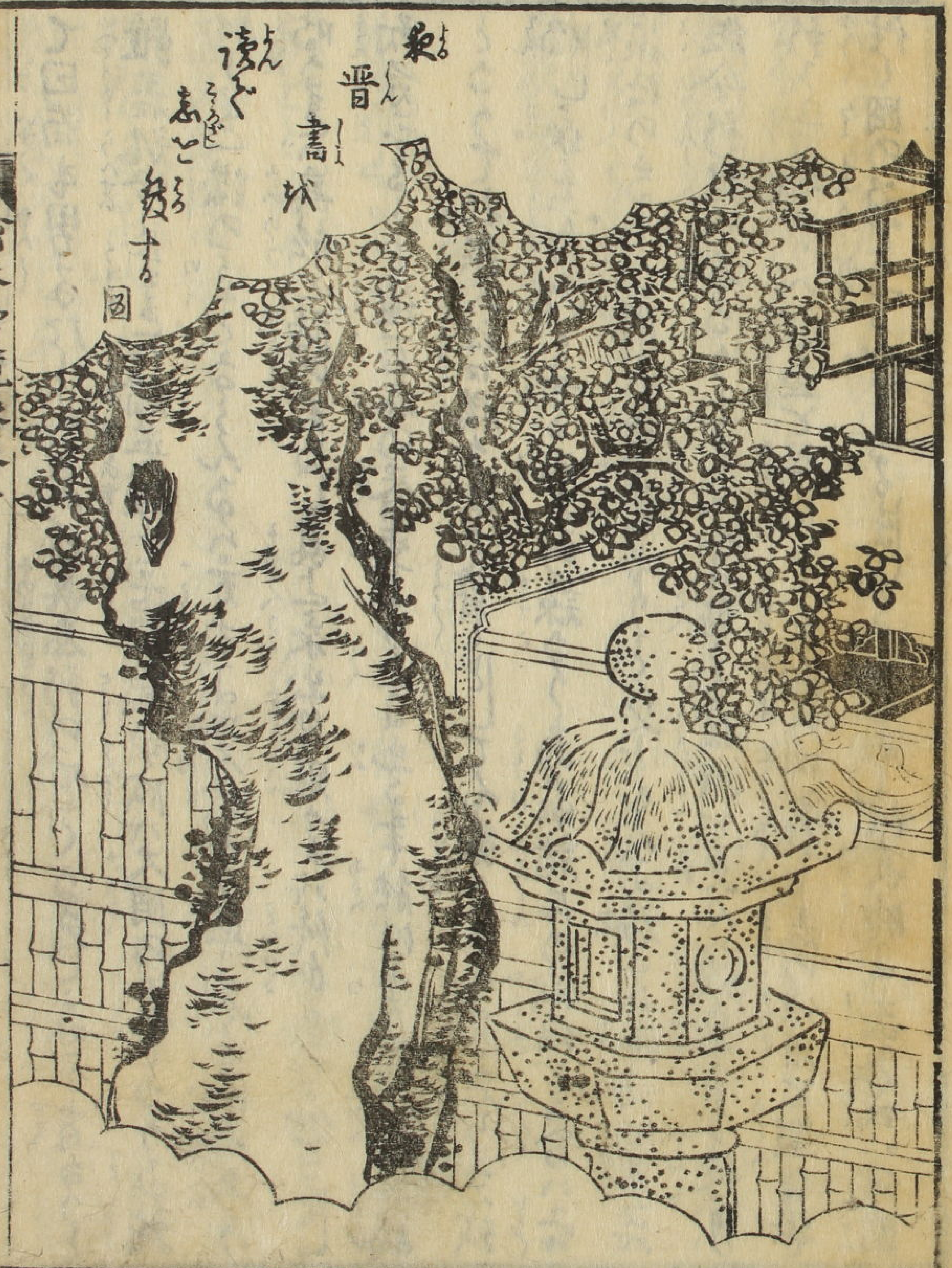
勤首におゐてハ柔和なる道を失ひ母に背き不孝なる者
在しと雖侍に所不果さ一命を抛ち不孝の罪科に生を
捨く共恩の万一を報じと先悦社ひハ不正に不在ぞ
たるらんハ一刻も早く罪を正さ直下するべしと面色かしも変ぜず
吏に膝する依なくハ義則ハ潔く沈吟し身ひ纔て經時ハ
對ひ安楽が所とも所問るぞ經時ハ若く終までもハ長源
こそ私が為の忠臣と其存ハ頼くハ讓賞状なる人か事状
状するのみ白るるに付ても私が意昧の勤継史の後悔社ハ曾作
ありしが是ハ義則ハ語ど喜ばしく長源が身ハ事もたてそ
なり安が意惑を捨く巣が忠を揚称せる君たるの器量を備て
未頼しく思ぞと稱美ましく其に長源が罪を釋し置く

經時ハ着用の時服若干と拝錫里肘の美目を施けり

大月史記讀て志操変ずる話

却説大月長源ハ幼年の志気を縱く浪に時移て延文二年茶候
二十に及といへども曾て酒色を変せず心を朝仕に委ね餘暇
有る時ハ文学武技を修業するのみ然りよんどころなく是ハ諸般の
藝術頗る其蘊奥を極ひ四書六經の諸書も已に文義を学り
今是ハ歴代の史書を閲んと欲ひ国庫役に預く官庫の蔵書を
請史無数叙屋に引籠りて是を接讀し史漏の欄を知り得諸鳴
に至て遠小役寝する事一部晋書桓温が傳を讀みけるに
及で大丈夫芳を百世に流能ずんバ臭を萬年に遺すべしと歎ぜし
所に至く心忽ち勃かでくも沈吟し書を掩て歎息し獨語し

大月長源之像


余晋書を読て志を発する図

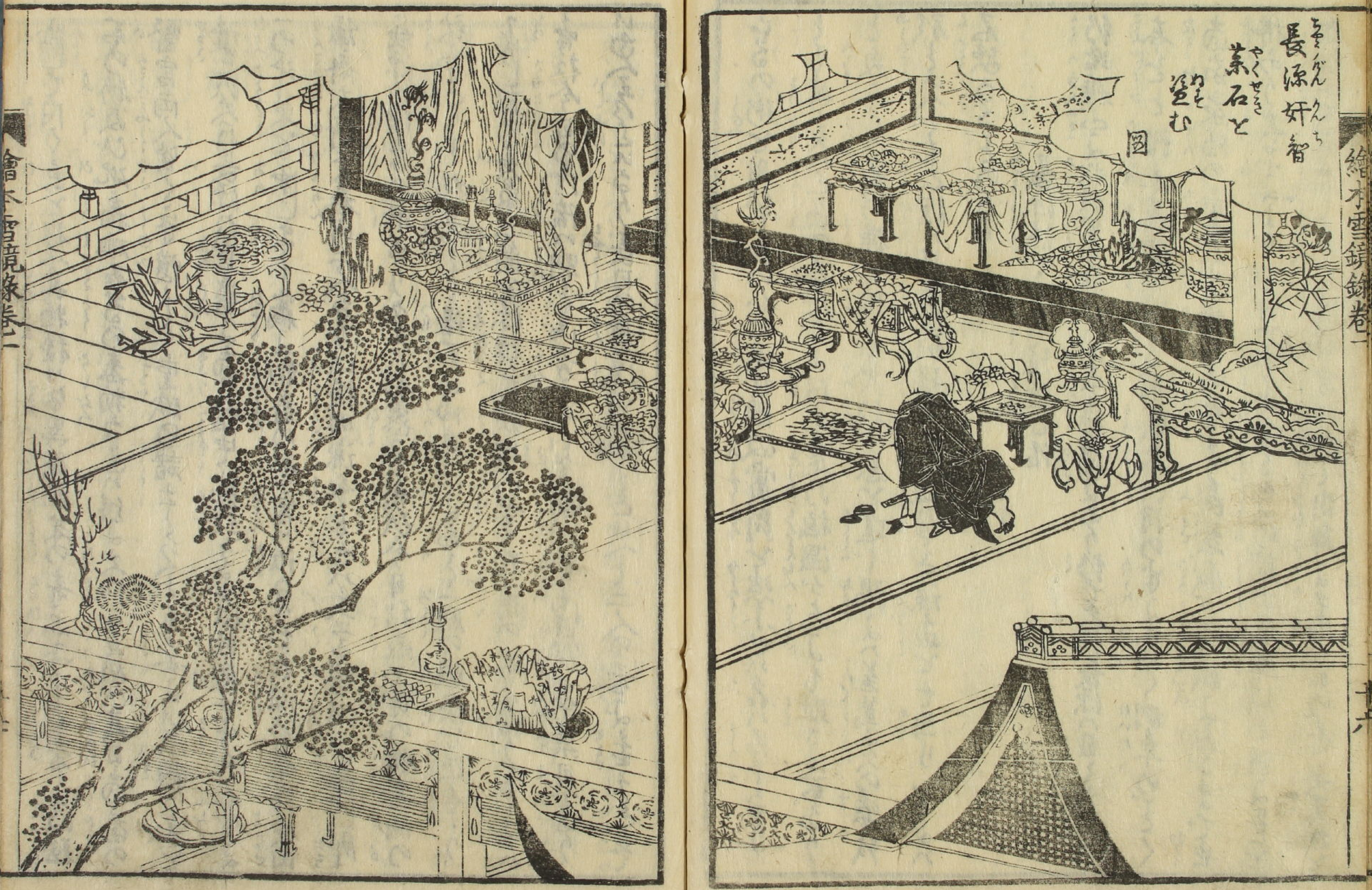
て曰苟も男子たらんものハ其志就のごとくなるべし豪不肖なりとも
雖若乱世に生れなバ諸英雄と並び起る事成バ大国の君ともなりなん統
べくとも一統の主となるまじけれバ方今に至り今四海太平乃
時なれバ其能を施の所なし其上豪出身賤きなれバ終身までも心を盡し
勤労なるとも漸一百石の吏より上に出る事能ハず徒に植温が気柄
とありて朽果ん社口惜けれと歎くとして心楽ざりしが忽ち一の謀
捨し家云不ハ志を守る匹夫の諫なり当家諸臣の職役をなべるハ各
家格の品下に閉く定る所ありといへども人に超る奇功をたてなバ
縦令新進の者なりとも又人に超へる抜擢を受んハ必定なり従つて
我を知れんよりハ智恵を巴りして我が身の功を顕し君の信用を激るに如ず
往く国の政を与る身となるほどのこともあらバ其時に当りて謀○試図

たるの術を用ひて君の心を迷せ国政賞罰を恣にせバ名ハ後代に残り
とも其実ハ乏功の君なるよ同じ是乃植温が志にも恥ざる所なり
と忽ち貞実の操を捨て奸邪の志を逞し陽にハ並萬実人の姿なれ
ども其人ども心裡ハ只管爵禄を貪盗るを謀る事をそ目て行ひけるハ
不敵なる者なりけり

長源謀て石菓球盗む話

紛路雑に名に兆し星に兆し人間各凶の間にあり就て大月長源ハ日々奸邪の
志をと雖未其宜を得ざる所其年六月の半に至く例年のごとく
当家家綱の重器先世の遺物より武器蔵書の類に至るまで虫
拂あり其品によりて日を分各掌る所の諸士司庫役と倶に是を
納む其名の品々を手て後殿宮の面に内庫に蔵る所の香具并物を

長源(ちやうげん)奸智(かんち)薬石(やくせき)と盗(ぬす)む図



出して曰く虫を初め其物種ハ皆異国舶来の奇品なれバ常ならぬ絵
虫の物及び砒霜礜石なんどの毒物なれバ猶更大切なれバ其日当番の
医官両人堅く守護しまた重職の諸士といへども妄に此を観る事を
許さゞりし大月長源ハ此日番にあたりて館中に勤仕なるが此動静をうかゞひて心中に
一の計策を案じ出し窃に勤番の医官ハ誰なるぞと伺ひ見るに横田
謙斎大野玄庵の二人なり此横田謙斎と云ハ文学医術に長じ即
長源が経学の師なりしかバ心安く幸ひ今日社家出身の織豆開の
秋祭りとて独楽しく諸所に偏午後に至りて一服の臘茶を點じより
なりし虫の菓菓二箇を添携て横田大野が勤番の所に至りて申しけるハ
今日の祭礼今日の汚沽ハ別して流芳にして此御用菓の菓菓見舞なり
ゆゑ人罷りこれより長日の労滞を是非さいと二人の前に出しける

横田答へて申さるるハ平日足下が文職業に怠惰ハ君恩を忘るゝ事の為よ
よるぞと能顔に戒諭ハ致せど今日ハ君侯も餘程退屈を致せられ恵の
茶菓おや主ハ賞味致しく勝ばハ臆しハんとぞ存り膝すゝ大野へ
廻し大月を前に長日の御よせんと長閑に語り及びなバ一六大月什侍した
星く横田に對ひ私先頃和國本草の書とりなるに君國に見當ざる
品を多載なり其名の君くも定まく内庫にハ多く在るを一面ハんう
議にも多く識ハ一見なるにふればしく申せバ奇の御柄拝見仕度ものなれば
其職本わしくが是非もなきやうにれく謀事なきけるに口ハ先ず横
田首と携今日の虫拾ひ一見に許されざるハ秘くも尤もなるが故に私び
軍陣城塞の用に備へし砒霜斑猫等の毒薬真中に雜ハ為一不届乃
族ありて盗まれんもあるがぐしくと起き出より思てあるの足下ハ

親く家門人へも此時に温厚にして能道理を弁へられしかば変じて其
器の善良し心体に相見殺さるべしと許されば長源太に既び浜に師
の恩によろしく毒器を一見せし往有様されど頼く出於ひの一間に入
並べ置たる毒を見せり毒薬の其中に在く懐中せし通天摩の香盒を
取出し竊に砒霜一塊を添く手捷く其中に納て之をふくく懐中し又
薬器を彼是取合くたゝぬ体にて此が立ち横田に一礼をなしべ程く間語
しくくとしが倍取りにぞ帰りたる之本来毒物を身に納まば変体を顕はさる
又ども長源通天摩の器に納く懐中せし由其障なく横山大将まゐ
長源が自立ちあるとも知らず心付ざりしは是非もなき事也

繪本雪鏡談巻之壹畢